



雨

Bブロックにエントリーされた全12作品を公開します。

覇者となったのは果たして誰??

<http://www.columnland.net/> にてごらんください。

時は1888年、科学の飛躍的な進歩で天候を支配する力を手に入れた気象庁は、その絶大な力をもって、日本はおろか、世界を支配すると宣言。当然世界各国は反発。日本も憲法第9条を改正して自衛隊を派遣させたが、気象庁の力の前には全くの無力。相次ぐ竜巻で各国の主力部隊は全滅。ニューヨークは砂漠化し、サウジアラビア全域は氷河に覆われてしまった。かくして気象庁の支配下となつてしまった地球。しかし、その地球を解放しようとする5人の若者たちがいた……

地球★戦隊

アースレンジャー

□OP主題歌□
□作詞・作曲□
□編曲□
□歌□
「戦え★アースレンジャー」
KOIZUMI SHINZO
安倍 純一郎
CAN ナオト

今日の天気は
青空駆ける
明日の天気を
夕陽に駆ける
快晴だ
小鳥たち
守るため
僕たちは

悪の極軸
ポイント報に
気象庁
週間予報

(語り)『―注意報なんかじゃ未来は決まらない……大切なのは今日を生きる勇気だ!―!』

戦え! 僕らの
この世に正義が
鍛え抜かれた
輝く未来を
アースレンジャー(昨日が)
ある限り(雨で)
その技で
撃込んだ! (PUNCH!)
アースレンジャー(明日は)
守るため(晴れるを)
その眼差しで
走るんだ! (KICK!)
レンジャー……(FIGHT!)
RANGER!

◇製作 著作◇ スタジオわんだー
―ついに敵の本拠地である、中央気象台への侵入を成功させたアースレンジャーたち。ブルー、イエロー、グリーン、ピンクが大勢の敵たちを食い止めている間に、リーダーのレッドは、ついに気象庁の中核である気象庁長官と対峙した!

漆黒のマスクを被り、黒ずくめの装束を身にまとった長官。果たしてレッドは、長官を倒すことが出来るのか!?

第二十一話『衝撃の真実! 気象庁長官の正体!』

舞台は豪雨の降りしきる中央気象台。建物の外ではレッドを除いたアースレンジャーの4人が、一向に減る気配を見せない敵たちと激戦を繰り広げている。その一方で、気象台屋上の通信塔の上では、レッドと気象庁長官が互いに剣を向け合つて隙を窺っている。濡れた鉄骨の上という、もし足を踏み外せば、一気に地上まで落下してしまうという、最悪の戦場である。

先に動いたのはレッドだった。

「うおおおお! 父さんの形見のこの剣、受けてみるおお!」

レッドが握る、赤き刻印の入った剣が、吹き荒れる風の中、長官に向けて振り下ろされる。

「……ふ、下らぬ。」

長官の持つ黒き剣は、まるで柳のようにレッドの剣をあつかりと受け流し、レッドはバランスを崩す。

「うっ!」

踏み止まるレッド。しかしそこに長官の蹴りが鋭く入る。

「うあつ!」

再びバランスを崩すレッド。たまたま長官と距離をとり、体勢を立て直す。

長官は追おうとしない。代わりに、氷の様に冷え切った声がレッドを追いかける。

「博士から何も聞いていないのか?」

「何の話だ!」

「お前の父親だ。今、形見の剣と言ったな?」

「父さんはお前に殺された。俺は父さんの遺志を継いで、お前を倒しに」ここまで来たんだ!」

「……ふつ、麻生博士も年を取ったか? 年寄りの悪趣味だな。素直に真実を伝えれば良いものを。」

「何が言いたい!」

再度踏み込むレッド。そのとき、長官の黒き剣が、まるで蛇のような動きでレッドの剣を絡めとった。一瞬呆然とするレッド。長官は奪った剣を手に取り、二本の剣でレッドに迫る。レッドはじりじりと後ろへ下がるしかなかった。

ついに鉄骨の端まで追い詰められたレッド。半ばやけになり、長官に殴りかかるが、あつさりとかわされ、逆に長官に鉄骨から蹴り落とされる。かろうじて鉄骨にぶら下がり落下を免れたが、長官を見上げるレッドの顔の上には、長官の黒き剣がその鋭い切っ先(レッドを睨みつけていた。

「これ以上は無駄だ。降参しろ。」

「アス・ひまわり!」もしきに起動する。お前たちに、もう勝ち目は無い!」

長官の冷たい声が、激しい雨と共にレッドに打ち付けられる。

「博士が……、博士が俺に嘘をついているとでもいうのか!」

「そうだ。まだ分からぬのか?」

突如長官がそのマスクを外した。

その時レッドが見たものは――5年前と全く変わらない、死んだはずの父の顔だった。そして、レッドに目の前の黒き剣の先には、レッドの剣と全く同じ紋様の黒き刻印が刻まれていた。

「私がお前の父親だ。」

「嘘だ! 嘘だ! ああああああああつ!」

―ついに明かされた気象庁長官の正体! しかし、その正体は死んだはずのレッドの父という、あまりに受け入れ難い真実であった。絶体絶命のレッド。果たして、レッドはこの残酷な現実を乗り越えることが出来るのか! そして、明日の天気は……?

次回、

第二十二話『レッド絶体絶命!』

運命のパラボラアンテナ!』

滅び

たとえば君が雨だったら、考えてみなよ。雨が降ったら、いきなり紐なしバンジージャンプを冗談みたいな高さからしかも莫大な数とんで、それだけでも怖くてやなののに、最近の地球は昔と違って柔らかい地面とか葉っぱとかとかじゃなくて、コンクリートが増えたから、痛いよ。間違いなく痛いよ。しかも今は、海の面積がちよっとだけ増えたよね、水つてもものすごい高さから落ちたら、あれ死ぬほど痛いんだよ。もう、のたうちまわっちゃうよ。しかも最近じゃ、なんか空気の周りに窒素酸化物だとか硫黄酸化物だとか知らないけど、いつばいあるじゃん。あれ本当に痛くてやなんですけどー。しゅわしゅわしちやって本当に気持ち悪い！ああーやだやだ。

おもいっきりただの愚痴になっちゃたけど、私ってある意味究極の奉仕者ですよ。ここまでしてあなたたちのために降ってあげてるのよ！！一日ぐらい変わりなさい！えっ？やだ？無理？キモイ？ふざけるんじゃないわよ！もう雨乞いされても降ってやらないんだから。もう遅いわよ！謝ってもだめよ！

こうして地球は滅亡した

虹の架け橋

—二人の物語—

降りしきる雨が私という存在をたたき続ける。悲しみは流れることなく、水溜りのようにたまっていく。

発端は突然だった。バンドを組んでいた仲間が辞めると言い出した。今のバンドの方針に乗れないというのが理由だった。一人の穴は大きすぎて、自然に解散という流れになってしまった。

「私のせいだ……」

口からこぼれたのはそんな言葉。思えば、約束の舞台に立つためにバンドを立ち上げたようなものだった。誰かと交わした、心に残り続けている約束のために。多分、それが今回の出来事につながったのだろう。

私自身が純粹に音楽を好きだったという事実は今更ながら気づいた。

「ねえ、どうしたの？」

誰かに声をかけられてはつと我に返る。同時に涙を止めていた何かがなくなつた。苦しみを吐き出すように声を吐き出した。心にたまっているものを全て吐き出してしまふと少しづつ涙も止まってきた。そこでやつと、相手の顔を見た。毎日クラス中に春のような笑顔を振りまいている顔がそこにあつた。

「ねえ、それなら私達と一緒にやってみない？メンバーは少ないけどさ……。どう？」

「え？」

あまりに突然の出来事に聞き返してしまった。言葉がしみ渡るようにゆっくりとその意味を受け取る。

「いいの？」

私の気持ちは笑顔で受け止められた。まだ雨は降り続けている。でも、ここにだけは陽が差している気がした。

視線の端に一輪の花が映る。青空を宿したような青い紫陽花だった。

虹の麓にはたからものが眠る

雨はやがて晴れ、虹が架かる。その虹はここから始まるような気がした。

わたしには好きな先輩がいる。

その先輩は仲の良い友達と組んでバンドをやっている。その中に女の先輩もいるわけであつたとしては気になってしまふ。だからといって、そのバンドに加わろうとするだけの勇氣もない。

梅雨の影響なのか、最近雨が降り続けている。同じ空から降るものだけど、雨と雪が似た現象だというのは嘘だと思う。雪のほうが静かで幻想的だし、何よりわたしを悩ませることはない。

「はあ。」

教室の窓から外を見ているとどうしてもあの風景を思い出し、溜息が出てしまう。初めて先輩と出会ったのも雨の日だったから。でも、それと同時にまだ何もできていない自分にも気づかされてしまう。このまま先輩が卒業してしまつたら、もう会えないかもしれないのに……。

気がついた時には教室全体が茜色に染められていた。雨は止んだらしい。虹は現れたのか気になつたけど、もう確かめることもできない。寝ぼけた頭のまま夕陽を見て、青から赤へ移るグラデーションが虹に似てるかななんて考えた。あ、緑が足りないか……。

そろそろ帰らなくちゃと思い、鞆を持ち上げると一枚のメモ用紙が舞い落ちた。

—例の先輩のバンド、一人増えてあの音楽祭に挑戦するらしいんだけど、あと一人足りないらしいよ。頑張れ！ By 心の友—
『頑張れ』の文字に顔が赤くなるの感じ、少しだけ夕日に感謝した。

虹は希望の象徴だったつけ。夕焼け空を足りない緑で結んでみたい。私の行動で縁は結べる、よね。

視線の端に一輪の花が映る。恋に染められたような赤い紫陽花だった。

虹の麓にはたからものが眠る

わたしが描こうとするこの虹のもう一つの麓には、何があるんだろう。

— 私、雨、記憶 —

とつ とつ とつ

雨垂れの音に、目が覚めた。

どうやら居眠りをしてしまったようだ。ベッドから立ち上がり、窓の外をうかがう。知らない街の、知らないたて物が、灰色がかった空のあちらこちらに埋もれている。下の通りをゆく人影はまばらで、みな足早に過ぎ去っていく。この旅を始めてから、もうずいぶんになるな。そんなことを考えながら、私はぼんやりと雨降りの通りを眺めていた。

ふと目が行った。色彩のない街の通りに、一点の紅を認めた。赤い傘の女性は、ゆっくりとした足取りで通りを歩いてきた。私は思わず窓へ顔を近づけて、あわてて戻した。いけない。私がなぜ旅に出たか忘れたのか。私は深呼吸をして、それでももう一度、窓の外に目をやった。彼女はすでに、私のいるたて物のすぐ近くまで来ていた。そこで、彼女はたと歩みを止めた。そして、まるで私がここにいることを知っていたかのように、こちらを見上げた。目が合った。

雨の音はいつのまにか消えていた。なぜかわからないが、手を伸ばせば、彼女に触れられる気がした。私は、気づけば、とまどい気味の手をそっと彼女のほうへ差しのべていた。彼女はさっきの女性のようでもあったが、また別の誰かのようにもあった。私の手を拒むわけでもなく、ただそこに立っていた。私の手があと少しで頬に触れそうになったところで、しかし、まるで見えない別の手に引きとめられたように、その手ははっと止まった。次の瞬間、私の目の前で、彼女は突然形を失いはじめた。私の口から、あ、という声が漏れるのがわかったが、私にはどうしようもなかった。凝り固まった私の手の先で、彼女の輪郭はみるみるうちに薄くなり、背景に溶けていった。消えてなくなる寸前に、それまで無表情だった彼女の頬から雫が落ちるのが見えた気がしたが、すぐにそれも消え去った。私の手は、どこにも触れることはなかった。

とつ とつ とつ

雨垂れの音に、目が覚めた。

そろそろ、この街も出ることにしよう。誰も知らない、新しい街へ。

「雨降る星空」

ざー……夕方からの大雨は当分止まなそうだ

「父さん、あれは？」

「あれは……えーとオリオン座だな」

此処には子供の頃、よく父親に連れてきてもらったものだ。私が今、娘にそうしているように。

此処からの星空はまるで変わっていない。懐かしい。

それにしても、いくら田舎とはいえあれから随分経ってる。この場所もとうの昔になくなったものかと思ってた。

大丈夫なのかね、この町は。

「父さん、あっちのは？」

「あー……たぶ、ん、白鳥座だよ。」

ざー……それにしても酷い雨だな

きつとこの星空はまだ、しばらく変わらないのだろう。

この娘が親になる頃にはどうだろう。さすがにもう無くなっているかもな。それまで私もたまにはこうしてこの娘連れてくるのも悪くないかもしれない。

「父さん、あれは？」

「……蛇使い座」

ざー……ざー……

雨降る星空　プラネタリウム

約束の二時半。渋谷でタクシーを降り、カフェの窓際に陣取った。これまでの人生で、俺が追い続けた男がそこに来るようになっていた。雨がやむ気配はない。眼下にはスクランブル交差点が広がっている。週末の夜は相変わらず人通りが忙しい。カラフルな傘たちが、信号が青に変わるたびに交錯して不思議な模様をつくる。このとても豊かな時代に、人はどこまで上を目指すのだろうか。どこまできたら満足するのだろうか。

高崎がやって来た。四年ぶりの再会。もう、前までの高崎ではなかった。少し雨に濡れたベレー帽をとって、軽く挨拶をすると、窓の外を見やりながら、自分の会社が倒産した理由を語り始めた。かつて常に人の数歩先を見透かしていた瞳が、今は、怖いくらいに無気力だった。自分の力を信じて切り込んでいった彼だが、この世には踏み込んではいけない世界があった。個人の力ではどうしようもない圧力が天才の肩にかかった。信じていた男たちが彼を裏切り、会社は事実上の倒産、そして家庭は崩壊した。

俺はただ、話を聞いているだけだった。どんな慰めの言葉も、無駄なことはわかりきっていた。挫折を味わったことのなかった人間の弱さが、俺を不安にした。それでも、高崎はこんな所で屈する男じゃないと、まだ俺は信じていたかった。抜けがらのようになってしまった背中が、夜の雑踏に消えていくのを見送りながら、雨の中、しばし立ちつくしていた。

ようやくやって来たタクシーに急いで乗り込む。ワイパーの動きをあざ笑うかのように、フロントガラスを水滴が叩きつけている。必死に腕を振るワイパーが、妙に自分の人生と重なって、俺は苦笑した。ちょうど二年前、九州一の進学校を卒業し、俺達が上京してから高崎はいつもトップを走ってきた。俺はずっと、高崎の背中を必死で追ってきた。一流の大学に行き、一流のエリートとして先頭集団を走っている、あいつの背中はいつも数歩先にあった。どんなに困難でも、いつもあいつだけは笑っていた。

「あなたが最後のお客さんです。」突然、運転手が言った。「え?」「私は今日で退職なんです。」タイヤの水しぶきが窓を濡らして、街の光が滲んで見える。「二年前になりますか?私の経営していた会社が潰れたんです。私は全てを失いました。出来ることは、地道にタクシー運転手をしながら借金を返済することくらいでした。あ、すみませんね、こんな話。」「いえいえ。」「二年前か?俺たちが走り始めた頃だ。フロントミラーに映る運転手の哀しそうな瞳を見て、突然、何かが込み上げてきた。」「高崎:お前はこれからどこへ行くんだ?お前はもう、走るのをやめてしまうのか?」「いや...」

「戻ってください!」気づいたら俺は叫んでいた。「え?」「...まだ終わっちゃいない。」「いいからお願ひします。今すぐ渋谷に戻ってください!」

高崎。勝手に立ち止まるんじゃないよ。

これからもお前は、先頭を走っていくんだろ?

いつもみたいに笑って、余裕で全部片付けるんだろ?

俺には、何ができるかなんてわからなかった。何もできないかもしれない。ただ、俺はここで高崎の背中を見失ったら、もう二度とあいつが戻って来ない気がした。

タクシーを飛び出して、夜の街を走り出した。雨の音さえ、もう聞こえなかった。

きっと、トップでいることに意味なんてない。俺はただ、あいつと走り続けていたいんだ。

守護神

僕は今、マンションの屋上にいる。

ポツポツ…

雨が降ってきた。不意に、水について考えた。

時には雨となって地面を潤し、植物に吸収されたり、動物に飲まれたり、地下水になって川として流れたり、湖や海になったりして、生き物を育む。自分には何もならないのに、回り続けて生き物を支える。

それなのに自分は些細なことで哀しみ、生きたくない挫折する。

哀しいとか、苦しいとか言う前に、自分も生きていかなければいけない気がした。

もう少し生きてみようかな、と思った。

水は雨として、また一人の人間の命を救った…。

A song of silence

「言葉で世界を変えられるなら、それはとっても素敵な事だとは思うけど」

外は雨。僕はその時の事を今でもよく覚えてる。でも、世界はそんなに都合良くできてないよね」そう締めくくった彼女の言葉に、僕は黙って頷いた。

「でも、意外だな。君が『伝導師』になりたいだなんて」彼女は笑う。「神がどうこうとか、そういうの嫌いなんじゃないっけ？」

「考えが、変わったんだよ」僕は嘘をついた。「ふうん」でも彼女は、ただそれだけ答える。

降りしきる雨は、音もなく僕らを覆い尽くす。

「でも、君に出来る？『言葉』によって、この世界を書きかえるなんてこと」彼女は立ち上がり、窓の外を見る。「じゃあさ、雨って何だと思う？これは、天が泣いている、とか言うのかな？」

「いや」僕は僅かに考えて、否、僅かに戸惑って答える。「きっと雨は、全部洗い流していくんだよ。人の想い……そう、憂いとか、悲しみとか」

彼女は一瞬静止して、そして僅かに寂しそうな顔をして答えた。

「うん。そう……かもしれないね」

僕は何も言わずに目を閉じた。

分かっていった。そんな言葉が、何の役にも立たない事ぐらい。もう、遅いんだってことくらい。

彼女は「贅」^ミ。それは、神の器として差し出される人間の事。伝導師は言葉を伝える事で人を神の元へと導き、贅はその肉体を明け渡す事で、神を人間の元へと誘致する。どちらも、全く正反対の方法で、人と神を繋ぐ。そんなくだらない儀式を、僕らの先祖は遙か昔から続けて来た。

神とは何だ？世界とは？僕らがどこから来て、どこへ行くのか？そんな事はどうでも良い。知りたいとも思わない。そんな事は良いんだ。

僕は、彼女に逝って欲しくなかった。

何が伝導師だ。何が「世界を変える」だ。僕はこんな明確な想いすら、彼女に伝える事など出来ないと言っただけ。

僕が変えたかったのは、彼女が死ななければならぬという状況を造り出すような世界。

僕が伝えたかったのは、彼女のようなスケープゴートを用意してはならないという訓示。

理想を求め現状から目を背け続けていた僕に、彼女はいつも微笑んでいた。自分の運命を受け入れた上で、僕の理想論に付き合っていてくれたのだ。居るかも分からないような神に、生命を捧げる必要などないと、彼女に解き続けていた僕。

彼女だって、それくらい分かっていたのだらう。変えなきゃいけないかったのは、彼女の意識ではなく、この世界の構造そのものだった。

そんな事、僕は気付きもしなくて。

彼女との最後の日にも、外は雨が降っていた。静かに降る雨は他の音をも消し去って、虚空に無音を響かせる。研ぎ澄まされた透明な夜。

僕には、彼女を見送ることしか出来ない。どれだけ言葉を探しても、それは全て偽りにすぎないような気がした。

そして、彼女はこの街を出ていく。

伝導師に連れられた彼女は、白一色のローブに身を包み、凛とした真つすぐな瞳を人々に向ける。神の化身。純白、それは穢れなき神の色。人々はそれを畏れ、戦慄する。

その姿を、僕は直視することが出来なかった。それはそのまま、彼女の決意の現れだ。自身が背負う運命を、全て受け入れるということ。

それは僕が、ひたすら目を背け続けて来たこと。

目の前に突き付けられたのは、或る一つの結末。僕には、世界を変える事なんて出来ない。

僕は、何も出来なかった。この日のことを、この街の人間の誰よりも先に知っていたにもかかわらず、僕は何もなかった。

これから先も、僕は何も変えられないのだらう。彼女を失ってなお、僕は何も出来ないのだらう。

俯いた僕に、彼女はそっと微笑んだ。

そのまま何も言わずに、彼女は街の外へ向かっていく。後姿は、どこか寂しげな気がして。

耳に届くノイズ。大地に注いだ雫。

雨音が強くなった気がして、僕は我に返る。

なにか、伝えなきゃ。

いまさら遅すぎるかもしれない。もう何も変わないかもしれない。……でも。

これを逃したら、永遠に伝えられなくなる。綺麗じゃなくなつて良い。拙くつたて良い。

僕の言葉で、伝えるんだ。

自分の、ありのままの想いを。

最後の最後に、僕は……

フッ、と。

雨の音が、消失する。

まるで、世界から音が抜け落ちていくみたいに。一体何が……、ああ、そうか……。

雨は、全部洗い流していく。

「」

僕の、彼女に宛てた最後の想いは、^{コトバ}雨にかき消されて、彼女には届かず消える。

とある放課後。今日の私には果たさなければいけない極秘任務がある。
とりあえずさつさと――

「……何やつてるんだ？」

あつさりと見つかったようだ。

あまごい

「雨乞い」

「……そうか、明日は体育祭だもんな。お前、運動苦手だったよな」

「体育祭なんて誰が始めたのかしら。めんどくさいったらありやしない」
「毎年の伝統だからな」

体育祭には嫌な思い出しかない。去年は運動が出来ないもの同士組まされて、初戦でボロ負けした。観客もいっぱいいたから、いい恥さらしになった。もう二度とごめんだ。

「生徒会の連中とか、こんな行事するくらいならその分勉強しなさいよって言いたいわね」

「俺はその言葉をそのままお前に返してやりたい」

「私はね、体育祭が嫌いなみんなの期待を背負ってるからいいの」
「背負ってるのか？」

「たぶん」

生徒の半分くらいは体育祭なんていらなと思うっていると、私は信じている。少なくとも、去年のチームメイトは同じ気持ちだろう。

「……私が雨乞いしてた、なんて誰かに言ったらぶっ殺すからね」
「はいはい。がんばれ、じゃあな」

私の祈りが天に通じたのは、それから三日後だった。

「雨といえカエルだろ」

春雨の降りしきる中、俺らは捕まえられた。

・カエル れいけつ動物であるりようせい類のうちカエル目の生物をさす。

と書かれた紙の横に水槽があり、中には7匹の蛙がいる。

誰が冷血動物だって？別に俺らの血も心も体も冷たくないって。相変わらず人間は意味不明なことを言うな。

七月十九日 チャイムが鳴り、教室にいた者達はそれぞれ夏休みの予定を話しながら帰っていった。校内に次のチャイムの響き渡る頃、教室にはだれもいなくなった。

「キーンコーン」鐘が鳴る。

信じられん。置いていかれた。明日から休みに入ってココに来なくなるんだろお前ら。

俺らの飯は？せめて蓋、外してとけや。ご丁寧にしまでしやがって。まあ、すぐに気付いて戻ってくるだろ。

八月一日 快晴。ところにより雷雨あり。水槽の中の蛙は一匹。

楽観的だった。いや、奴らを買収されてた。誰も来やしない。仲間全滅。俺も死にそう。だが、腹はすいていない。俺は仲間の死体にたかるハエを食ってきたからだ。それよりも乾き。水が欲しい。外では雷を混じえた雨が降っている。あの雨を一滴でももらえたらどんなことでもするのに。

八月一日 快晴。水槽の中の蛙は零匹。

九月一日 新学期になった。一人の女子が水槽をのぞいて悲鳴をあげる。水槽の中には蛙の白骨が七つ。彼らの責任のなすりつけ合いが行われ、幾人かが泣き始めたとき、先生が入ってきた。先生は話を聞いた後、こんな過ちを繰り返さないように、と皆に約束させた。そして墓を作ろう、といった。皆はこの案を受け入れ、校庭の隅に墓を作った。そして彼らは毎日墓参りに来ることを誓った。

なんて面白い。俺らの墓が作られるらしい。墓つてのは死んだ者を忘れないために作るんじゃないのか？生きているうちに忘れ去られた俺らには必要なものか？相変わらず人間は意味がわからない。だが、奴らは毎日来ることを誓ってくれた。死んでしまったが、毎日忘れずに来てくれるなら、いいかもな。

数日間、墓の前の花が尽きることはなかった。だが、次の日曜日が過ぎる頃、花の数は半分になった。そして、秋の始まる頃には花は置かれなくなり、冬休みの始まる前に校庭の隅の墓は校庭の一隅に戻った。

嘘つきどもめ。

春雨の降る中、卒業式は無事終わり、子供達は手を振りながら別れの挨拶を叫ぶ。誰一人、墓を思い出す者はいない。校庭に別れのあいさつが響く、さよーならー、バイバイ。

バイバイ、冷血動物たちよ。

誰一人、墓を思い出す者はいなかった。

蟬時雨

——雨の日のセミってどうして思う？

それはあの日、入院した母を見舞うために訪れた病院での出来事。

そのとき私はまだ十歳で、毎日楽しい出来事がたくさん在りすぎて、どれもこれももうほとんど覚えなくなってしまったけれど。

その少女の事だけは、忘れる事ができない。

歳は私より少し上くらいで、まだ幼さの残る顔だったけれど、妙に大人びていたように思う。

それでいて儚げで、まるで幽霊のような、空気のような、フワフワした不安定な存在感。

あの時、隙間の開いた病室の中をふと見ると、ベッドの上の少女と目が合った。

少女は薄く微笑むと、おいでおいでと私を招き入れたのだ。

雨の日のセミってどうして思う？

きつとね、私たちが気づかないところで鳴いてるんだと思うの

自分は今生きているんだぞ、って誇るように一生懸命ね

私はツクツクボウシの鳴き声が一番好きだな

ツクツクボウシ：ツクツクボウシ……ってね

あの声は魔法の呪文なんだよ？

何でも願いを叶えてくれるの

さつきね、木からセミが落ちるのを見たんだ。ぼとり、ってね

死ぬのって結構あつけないものなんだよね

あのセミはもう死んじやったのかな

私ね、きつともうすぐ死んじやうの

私の家ね、私一人しか子供がいなかった。だからもし私が死んだら、もう終わってしまうの

それに、ずっと病弱で家にこもりっぱなしだったから、誰も友達いないんだ

私が死んだ後も、私のお墓に来てくれる人はいるのかな

私は、だれかに何かを遺す事ができたのかな

私を……覚えていてくれる人はいるのかな

ぼくは忘れないよ、って？ ……ありがとう……

じゃあ指切りしよ。指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ますー、指切った

……約束だよ？

次にその病室を訪れたとき、部屋の中は空っぽになっていた。

彼女が本当に死んでしまったのか、それとも元気になって退院したのかはわからない。

看護婦さんにその少女の事を聞くと、不思議なことを言われた。

——あら、あの病室なら長いこと使われてないはずよ

あれは夢だったのだろうか。だけど私はあの小指の感触を確かに覚えている。

あれから三十年経った今も、私は蟬の声を聞くたびに思い出すのだ。

母の墓前に花を供えた帰り道、木の枝にツクツクボウシがとまっていた。

あの夏の日、私にとって特別で、不思議な体験。

あの日と同じ、聞こえる蟬時雨。

土砂降りの日に、

きまつて傘を差して
外に出る

聞こえるのは

雨の音

ただ、それだけ

それだけの世界

『私は私』

そういうのが感じたくて

雨の日、外に出てみた

それが嬉まりだった

私のすぐ周りと

傘の外との境界が

しつかりと感じられて

雨の冷たさと私の体温が

はつきりと違っていて

雨の音だけの世界の中に

私の鼓動が強く響いて

本当に私はここにいるんだ

存在しているんだって

感じることができて

とても嬉しくって

だからずっと

雨の日ばかりで

あればいい

いつも傘も持たずに

外に飛び出す

いつからかそれは

私の習慣になった

悲しいこと

悔しいこと

強い雨にあたっていたら

きれいさっぱり

流れていくようで

雨はとっても温かくて

ずっとあたっている

自分と周りの世界との

境界が曖昧に感じられて

それはとても心地良くて

まるで

世界と一体になったような

感じがして

どんなに辛いことがあっても

それはほんの

些細なことのような

感じがして

いつだって助けられている

明日も雨だったら

いいのになあ……

自分の部屋で

物思いに耽る

それがお約束

雨は乾いてしまった

森を潤し

大地を潤し

川を潤し

海を潤す

決して交わることはない

空と大地を繋ぎ止める

すべてを潤し

すべてを繋ぎ止める

恵みであり

絆である

でも雨だけじゃ

花は一生

咲くことはない

太陽の下で

初めて花は

強く咲き誇る

てるてる坊主を吊るして思う

明日はきっと

晴れるだろうか

コンテスト結果				
[Aの部]				
コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	雨の降る日に	0 pt	10 位	1 sp
		傘に、レインコートに、雨に僕――4度の問い。起承転結のカタチを目ざしたのかなと読みました。構成が整っていて読みやすいけれど、いちばん読後感を左右するラストの部分がちょっと弱いかな。「僕は雨が降るのを待っていた」のあと、なぜ？ という説明がないとシリキレトンボの感。 特別賞：意味ありげで賞（オチがよくわからない）		
A02	雨乞い	5 pt	7 位	0 sp
		雨乞いvs晴乞い。なあんだユメオチかあ、と思いきや、悲劇はいきなり我が身にぐさり。その安心から絶望への転換がドラマティックでどきどきします。合わせ鏡の世界観。イメージ喚起力もゆたかでした。 語りすぎないのも本作品の良さと言えるでしょう。せっかく言葉を刈り込んで、こんなにコンパクトに仕上げたのに、字が小さいのがほんとに残念。		
A03	雨宿り	9 pt	4 位	1 sp
		いきなり「うちに来る？」はハゲしいあなとびっくりしてると野良犬オチ。雨粒みたいにずっと着地して、前半のしみじみパートをうまく受けとめてほのぼの。 しかし、この野良犬君、バスのあとを、いっしょうけんめい追いかけたのでしょうか？ それはそれでたいへんそう。 特別賞：デジャブー賞（どこかでみたオチであるから） イチオシフレーズ：「そんな君を好きになったんだ。」		
A04	明日天気にな……	8 pt	6 位	3 sp
		前回開花した忘れな草テイスト（勝手に命名）全開！ 作風が安定しているというか、変化なしというか。 雨とブランコ、描写は巧みだけれど、ちょっとお約束すぎて、うーん、この作者さんの描写力なら、もっと妙ちくりんな設定にすると傑作が誕生するんじゃないかなあ、と高度な注文、出してみます。 リストカッターを倒したあとは、自分との闘いだ！ 特別賞：涙が雨で隠れて（萌えた）ときめいたで賞/くさすぎ賞/作者出てこいやァー!!賞（作者の実体験だとしたら許せない） イチオシフレーズ：「バカ、謝らないでいいんだよ」		
A05	傘っておかしくね？	23 pt	1 位	1 sp

		さくっと入ってくるタイトルが、しっかり本文のキーフレーズにもなっている構成のワザがおみごとでした。 急な雨に小さな恋の傘が開く。なんだか、このそばく&いっしょうけんめいトークを、一緒に傘の中で聞いているような親しみやすさ。ハッピーエンドの予感が、ここちよい読後感につながります。好感を呼び込んでの首位、おめでとう!!! 特別賞：なると賞（良純がよかった） イチオシフレーズ：「傘っておかしくね？」×2
A06	If	2 pt8 位0 sp 緑の逆襲。雫の一滴で終わる幕切れが鮮烈な印象を刻みます。 すごい文章力ですが、わけても「音」の配置のうまさになりました。「木葉の囁く旋律」「潰れた小さな声」、映像的な描写の要所要所に「音」が差し込まれているおかげで、読者がとても想像力をかきたてられます。 まことに瞠目すべきイメージ喚起力でした。これでお題が「緑」だったらカンペキ！
A07	本心	0 pt10 位1 sp 投げやり感の演出でしょうか。雨の日はめんどくさい、という意図？ 特別賞：お手軽で賞（読むのが楽だったから） イチオシフレーズ：「あーめんどくせえ」
A08	ことわざ一口解説講座	18 pt2 位5 sp ほんとに、一口だなあ。 それだけに、インパクト巨大でした。ご本人もびっくりの2位快挙＋最多特別賞（8班制覇）＋イチオシフレーズ大賞受賞です。おめでとう!! 特別賞：直田丸麻紀（じかたまるまき）賞（カリスマを感じさせるインパクト）/哀川賞（インパクト）/あえて長澤まさみ賞（ざんしん!）/僕は森光子賞（長澤まさみが好きだから）/ありえないで賞（ここまで自分の趣味を大っぴらにできる人がうらやましい） イチオシフレーズ：「雨降って直田丸麻紀」×3 「泣きっ面に長澤まさみ」
A09	「魔が差す」もとい「正義が差す」	9 pt4 位1 sp わはははは。誰でもなれる即席ヒーロー。 胸ポケットのピピピで笑わせたあと、ニセヒーローが、自分のついたウソに自分でほろりとしてしまうラストにしみじみ。 設定の妙といい、支える哲学の深さといい、グレート！のひとことです。 特別賞：ヒーロー賞（青年は間違いなく少年のヒーローである） イチオシフレーズ：「正義は語るもんじゃない」「ゼロレッド」
A10	日本の将来が危ぶまれる理由と現代の若者の心	15 pt3 位1 sp 雨→虹→二次元と連想して、もう聖地まっしぐら。 そのわりに、ちゃんと「日本語」で語っていただいているので、まだまだ軽症、現実復帰の可能性大、と見た！ おだいじに。 特別賞：オタク賞（イメージしていた東工大生とフィットしたから） イチオシフレーズ：「例：○○たん萌えー★」×2
		0 pt10 位0 sp

A11	RAIN BOW	小さな悩みが少しずつ寄り集まって雨になる。流れてしまえば二次、もとい虹が待つ。 一文一文ていねいに推敲し、自分自身を励ますような普段着トークが親近感を誘います。応援したくなるような好感度大の仕上がりでした。 イチオシフレーズ：「ごめんなさい、友達のままで…」
A12	酸性雨について	1 pt 9 位 1 sp 髪の毛君。身を以て酸性雨の被害の被験者となる。 そのケナゲさ、涙なくしては読めませんね。実験レポスタイルのシンプルさ、敢えてどーんと余白をあける演出、ブラボーでした。 特別賞：レポート賞（一回でもいいから、レポートをこんな感じで済ませたい）

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	地球★戦隊 アースレンジャー	25 pt	2 位	8 sp
		史上最強の表紙、キターーーー!! もとい。おもしろさはもちろん、歌詞・ふりがな、デス・ひまわりと細やかな造りこみが、ほんとにすばらしかったです。 特別賞：ベストシンガー賞（ただ単にうたってほしい!!）/歌ってほしいで賞/続きが気になる賞（これがテレビ番組風の力か!!）/次回に期待で賞（東でやってほしい）/作曲賞/CANナオト賞（ベタすぎが良い）/レイアウトがよかったで賞（がんばった感）/気象（賞）（気象庁が出てきたから） イチオシフレーズ：「そして、明日の天気は…?」「一注意報なんかじゃ未来は決まらない…」「運命のパラボラアンテナ!」×2 「嘘だっ! 嘘だああああああああっっ!!!!」×2 ということで最多特別賞およびイチオシフレーズ大賞もゲットです。		
B02	滅び	0 pt	11 位	2 sp
		友だちに話しかけられているような、とても親しみやすい雨さんトーク。窒素酸化物なんていうネタの入れ方もうまい。 さいごの1行、「こうして地球は滅亡した」が大げさでユーモラスですけど、ここだけ視点を変えて説明してしまうより、ずっと雨さんに語ってもらったほうが、この世界の中で完結して良かったのでは? 特別賞：究極の奉仕者賞（最後のオチでわれた）/気象（賞）（雨の偉大さを知りました） イチオシフレーズ：「こうして地球は滅亡した」		
B03	虹の架け橋 一二人の物語ー	1 pt	9 位	1 sp
		一作で二話分おもしろいつくり。並行するけど交わらない。いや交わるのか。ユニークな試みで、きれいに仕上がってものいるのですが、何度か読み込まないと二つのお話の関係性がたどれないところが難です。 私は、上段の春の笑顔さんが下段の「女の先輩」に該当するのかなと思ったのですが?? 特別賞：塩原賞		
B04	ー 私、雨、記憶 ー	2 pt	7 位	0 sp
		夢うつつのぼんやりした思い。求めて手を差し伸べても、儚く溶けてしまう幻影。その一瞬をていねいにあざやかに見せていただきました。 ただ、イメージだけの感があって、それこそつかみどころがなくってしまうので、旅を続ける「私」の個人史をもう少し見せると良かったのでは。		
B05	雨降る星空	1 pt	9 位	0 sp
		雨なのに星、なぜ? ああ、おんぼろプラネタリウムなのね、とタネアカシにナットク。 親しみやすいつくりですが、「懐かしい」と語っているあたり、これだけでは伝わらないので、郷愁をかきたてるエピソードをピンポイントであしらうなどすると、ぐっと個性が出てグレードアップします。具体性の衣を身にまとう工夫。おためしを。 イチオシフレーズ：「プラネタリウム」		
B06	Top runner	10 pt	3 位	1 sp

		23年という偶然の符合が人生の何かを変える。走り続けよ、我が人生。そして友よ、君もまた。 ていねいに組み立てられて、ドラマがふくらんできます。熱いラストもグッド。 ただ、19時半という時間設定が、タクシーを使うには早すぎて、もっと夜中のほうが挫折感も盛り上がって良かったのでは？ 特別賞：よく書いてるで賞（おしかった4位）
B07	守護神	0 pt11位0 sp 人生のやり直しを決意させた雨。思考のプロセスがていねいにたどられているのですが、いきなり自殺撤回まで行くのは飛躍しすぎの感。小さな元気をもらった、くらいの押さえ方のほうが似合いそうです。 あと、B-2と同じで、これもさいごの1行は削って、全体を一人称トークでまとめたほうが統一感が出たのでは？
B08	A song of silence	6 pt4位1 sp 世界から音が抜け落ちる――それまで背景だった雨がぐっと舞台前面に出てくるラストが絶大な効果で悲劇性を盛り上げて秀逸。 前半がリクツっぽかったか。 特別賞：「空気読めよ雨!!」（世界観がよかった）
B09	あまごい	6 pt4位0 sp 軽妙なかけあいがこちよく、三日後というオチも笑えるのですが、どんなふうに雨乞いしてたかを見せていただけると、もっと物語に入り込めたと思います。 ラジオドラマ的に、「絵」が見えないで会話だけを聞いている感じ。 イチオシフレーズ：「それから三日後だった」×2
B10	「雨といえばカエルだろ」	32 pt1位1 sp 残酷だ！ 動物虐待だ！ 「冷血動物」というフレーズがきっちり効いてストーリーを支えて、カエル君のキャラクターもしっかり立ってグレートでした。 わけて、昇天しちゃってからも語り続けた構想力がいいなあ。そう、たしかにニンゲンも冷血動物。まちがいない。 シニカル視点が効いて、デス・ひまわりの猛追を振り切ったの首位、おめでとう!!! 特別賞：そんなもんで賞（そんなもんだから） イチオシフレーズ：「バイバイ、冷血動物たちよ」×2 「雨といえばカエルだろ」「嘘つきどもめ。」
B11	蝉時雨	5 pt6位0 sp 蝉時雨に蘇る三十年前の思い出。定番の病院少女の儂げなようす。ツクツクボウシで叶えた夢は輪廻転生？ 少女のセリフがありきたりなのが惜しいです。 ときに病院モノはTAの「弟子」さんがご専門として極めておられますので、ぜひ、アドヴァイスをいただいてみてください。お茶会で「おりづる」と叫べば、召還できるはずですよ。
B12	土砂降りの日に、	2 pt7位0 sp 雨が好き。傘の中で、傘の外で。同じ状況でも、人によっていろんな意味づけのしかたがあるのだなあと納得です。 ただ、上段と中段の対称性はうまくできていると思うのですが、下段の位置づけがよくわかりませんでした。傘をさして晴れの日の外に出るヴァージョンなんて並べてみたらおもしろいかな、とTAさん談。